様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１３２０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５９３４３２

研究課題名（和文）発達障害を危惧した「気になる子ども」の早期療育・虐待予防支援に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic Study of the Home Health Nursing Practice for Children with Suspected Autism Spectrum Disorders and their Parents by Encouraging Early Intervention and Working to Prevent Child Maltreatment

研究代表者
田村　須賀子（Tamura, Sugako）

富山大学・大学院医学薬学研究部(医学)・教授

研究者番号：５０２６２５１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：乳幼児健診等で発達障害の可能性を危惧された「気になる子ども」と育児者に対する、保健師の家庭訪問等の個別支援の特質を検討した。熟練保健師7名による個別支援過程において、保健師の意図302件、保健師の行為1,575件を記述・内容分析し7分類45項目に統合した。また全国市町村1,650の母子保健担当保健師に質問紙を郵送し、実践者の意見を把握した。740件(45.8%)回収し、各項目で「自分もよく実施する」「実施したことがある」の回答者80%未満が16項目、「非常に重要と思う」「重要と思う」の回答者90%未満が2項目と概ね支持され、早期対応・虐待防止のための指針案として提案できる可能性を確認した。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to explore the nursing practices of public health nurses (PHNs) who provide home health nursing care for children with suspected Autism Spectrum Disorders (ASD) and their parents. Seven nurses were interviewed about their intentions and actions in their home health nursing practice. In total, 302 “intentions” and 1,575 “actions” were recorded and integrated 7 factors and 45 items for the characteristics of nursing care. Surveys of PHNs in local governments throughout Japan (n=1,650) were conducted. Using a Likert Scale contained 45 items, participants were asked to rate each item. 740 (45.8%) completed questionnaires were returned. Fewer than 80% participants reported “frequently used” or “used” were 16 items. Fewer than 90% participants reported “very important” or “important” were 2 items. We found it possible to use the characteristics of care as guides in providing care, by encouraging early intervention and working to prevent child maltreatment.

研究分野：地域看護学

キーワード：発達障害の可能性を危惧した「気になる子ども」　家庭訪問援助　保健師の意図　保健師の行為　早期療育・虐待予防支援

１．研究開始当初の背景

乳幼児健康診査や子育て相談の場で、発達障害の可能性を危惧した「気になる子ども(多動、衝動的、育てにくさ等)」を把握したとき、保健師はその子どもへの育児支援に併せて、療育支援への早期対応・子ども虐待防止が求められる[1)]。

子どもの健全な発育発達支援として保健師は、見極めにくい広汎性発達障害の可能性のある児を乳幼児健診等で早期発見し、①適切な療育に結びつけ、専門スタッフからの助言や指導が得られるようにする、②育児者とともに関係者、関係機関とネットワークを組み、支援体制を整備する、ことを目的に個別支援を行っている[2)]。

保健師による本児とその家族への個別支援では、家庭訪問という手段を主軸として、電話相談、メール相談、関係機関・職種への連絡により実施する。家庭訪問は、保健師の実践活動における中心的・特異的な方法であり、個別支援で主軸となる方法である[3-5)]。「気になる子ども」という課題を家庭・地域生活から捉えなおし、家族の対応・対処能力をアセスメントし、家族の回復力を活かした関わりに、本児とその家族のペースに併せて実施できる方法である。その特質は明確に示され共有する価値がある。

２．研究の目的

「気になる子ども」と家族への個別支援を捉え、そのあり方を含めて検討していくときに、家庭訪問を主軸とした個別支援(以下、家庭訪問援助)を捉えることは、今後の保健師の対応方法の質向上、実践能力の向上に寄与しうる知見が得られ、より適切な方法であると考えられた。

本研究は、乳幼児健康診査や子育て相談の場で発達障害の可能性を危惧された「気になる子ども」と育児者へ家庭訪問援助の特質を明確にし、支援の方向性を得ることを目的とする。家庭訪問援助とは、保健師等の看護職による家庭訪問という手段を主軸として、電話相談、メール相談、関係機関・職種への連絡を伴った、本児と家族への個別支援のことである。

３．研究の方法

(1) 研究対象

五歳児健診を先駆的に実施する市の、熟練保健師(原則５年以上の実務経験)による、乳幼児健診等の場で「気になる子ども」と家族に対する家庭訪問援助の過程を研究対象とする。情報提供保健師には、①自身の家庭訪問援助を記述し見直すことの意義を理解し、本研究に協力してもらえる保健師、②家庭訪問援助を再現し、自分の言葉で記述できる能力のある保健師とした。７人の保健師から協力が得られた。

(2) データ収集方法

保健師による家庭訪問援助再現記録から調査項目①保健師の意図、②保健師の行為をデータ収集する。保健師の意図は、保健師がその専門性において責任もって行う保健師の行為を看護の目的に基づいて方向づける考えである。保健師の行為は保健師の意図が方向づける保健師の行為を保健師の意図に対応させて記述する。保健師の行為には、保健師が内面において思慮・選択・決定することも含めている。

保健師による家庭訪問援助再現記録は、次の手順により記述した。情報提供保健師には、その援助過程を自身の言動ばかりでなく、内面で考えていたこと、考えていたが結局行わなかったことも含めて記述するように依頼した。また対象の家庭内で実施したことばかりでなく、前後の電話や e-mail での連絡、関係機関・職種への連絡も含めて記述するように依頼した。

次に、研究者がその記述内容から保健師の意図と行為の内容について、保健師にインタビューで確認した。回答により研究者が加筆修正し、保健師に確認する。これを合意できるまで繰り返し、保健師による家庭訪問援助再現記録とした。これを事例ごとに保健師の意図を時間順に記述し、それに対応させて保健師の行為を記述した。データの記述と分類の適切さは、共著者２名に検討してもらい信頼性・妥当性の確保に努めた。

(3) 分析方法

保健師の意図と、意図が方向づける保健師の

行為の組み合わせに対する内容構成分析と、次の分析の視点をあてて保健師の意図と行為を概観して性質を取り出した。すなわち①看護援助を提供する者と受ける者との相互作用、②家庭・地域生活を含めた援助提供、③援助ニーズの優先度の判断と援助提供方法の選択、④対象の過去の経験に対する援助提供、⑤保健福祉サービスへの適用、⑥看護援助の他事例や保健事業・施策への反映、⑦関係職種との連携、である。分析の視点は、今までの研究経過から修正を重ねて採用してきたものである。これらを事例ごとに記述し、保健師の行為と意図を概観して取り出した性質を集めて、保健師による家庭訪問援助の特徴としてまとめた。この特徴の社会的妥当性を評価するため、全国市町村母子保健担当保健師(東日本大震災被災地三県を除く全国市町村 1,650)への郵送法による質問紙調査(リカート式と自由記述)で、実践者の意見を把握した。各項目を「自分もよく実施する」「実施したことがある」回答者の合計の割合が 80%未満の項目、「非常に重要と思う」「重要と思う」回答者の合計の割合が 90%未満の項目を要検討項目とした。

(4) 倫理的配慮

情報提供保健師への研究協力依頼に先だって、また質問紙発送前に研究代表者の所属機関の倫理審査委員会の承認を得た(臨認 22-7、臨認 25-90)。上記に該当する情報提供保健師本人に研究の主旨と目的を伝え、協力を依頼し合意を得て、保健師の自由な意思で研究協力してもらえるように口頭で伝えた。情報提供保健師が研究協力できる職場の条件を整えるために、依頼文書など事務手続きをした。その際、研究協力同意書と研究者の研究倫理誓約書を交わした。

また情報提供保健師の実践能力に対する尊厳を保証し、記述内容に合意を得ながら情報収集した。なお保健師の振り返りの情報収集であり、前もって研究協力依頼ができなかった事例本人・家族に対しては、特に個人を特定する表現を避け、プライバシーを守る配慮をした。

4．研究成果

保健師の意図 302 件、保健師の行為 1,575 件を記述・内容整理・分析し、支援指針を検討した結果は以下のとおり 7 分類 45 項目にまとめられた。この項目へのリカート式質問紙調査で、740 件(45.8%)の回答を得た。各項目で「自分もよく実施する」「実施したことがある」と回答した者が 80%未満だったものは 16 項目、「非常に重要と思う」「重要と思う」と回答した者が 90%未満だったものは 2 項目だった。

(1)事例ごとに分析の視点「1) 看護援助を提供する者と受ける者との相互作用」をあてて、保健師の意図と行為の組み合わせ 44 件を概観して取り出した性質の記述をさらに概観して「育児者のそっけない反応、転居、電話に出ない等があっても、接点をもち関係形成の可能性を探る」等(他 5 項目)とまとめた。そこから「今後どうしたいか語られるような育児者との信頼関係を形成し、維持できるようにする」を家庭訪問援助の特徴とした。「自分は実施したことがない」回答者数が多いのは 1 項目「育児者の支援の求めに保健師が応じなかったという思いを把握したとき、育児者との関係性を修復する」だった。

(2)事例ごとに分析の視点「2)家庭・地域生活を含めた援助提供」をあてて、保健師の意図と行為の組み合わせ 95 件を概観して取り出した性質の記述をさらに概観して、「対象本児・家族の家庭・地域生活状況・困窮の程度、家事能力、社会性・理解力、精神状態に配慮する」「育児がうまくいかない状況に潜む困難、家庭で助言の取り入れ、就労と休息のバランス、児の育てにくさと育てることの母の困難感に配慮する」等(他 4 項目)とまとめた。そこから「育児者が育児を放棄する可能性も想定しつつ、児への対応能力を引出し、良好な家族内人間関係のもと、療育生活を継続できるようにする」を家庭訪問援助の特徴とした。「自分は実施したことがない」回答者数が多いのは 1 項目「児の発達上の課題を検討する場に両親を巻き込み、共に取り組めるようにする」だった。

(3)事例ごとに分析の視点「3) 援助ニーズの優先度の判断と援助提供方法の選択」をあてて、保健師の意図と行為の組み合わせ 147 件を概観して取り出した性質の記述をさらに概観して、「育児者と児のおかれている状況と、療育支援の経過における課題を整理する」「育児者の児への肯定的な捉え、前向きな取り組みを認めていく」等(他 7 項目)とまとめた。そこから「育児者と児のおかれている状況と受け止め方を確認し、児を肯定的に受け止めていることを認めつつ、療育への適切な対応をしてもらうことを優先する」を家庭訪問援助の特徴とした。「自分は実施したことがない」回答者数が多いのは「育児者と小学校教員と共に、児の発達上の課題を解決できるよう、正しい知識、適切な対応方法について習得してもらう」他 1 項目だった。

(4)事例ごとに分析の視点「4) 対象の過去の経験に対する援助提供」をあてて保健師の意図と行為の組み合わせ 37 件を概観して取り出した性質の記述をさらに概観して、「診断を受けた時の気持ち・療育施設での訓練に対する不信感を受け止め、療育を継続していけるようにする」等(他 3 項目)とまとめた。そこから「障害の診断を受けた時の気持ち、関係機関・職種に対する思いを受け止め、療育を継続できるようにする」を家庭訪問援助の特徴とした。「自分は実施したことがない」「重要と思わない」回答者数が多い項目はなかった。

(5)事例ごとに分析の視点「5)保健事業や福祉サービスへの適用」をあてて、保健師の意図と行為の組み合わせ 87 件を概観して取り出した性質の記述をさらに概観して、「より詳細な発達上の確認ができ、より専門的な療育支援サービスを利用できるようにする」「療育支援機関の方針を育児者に理解してもらい、無理なく継続できるようにする」等(他 4 項目)とまとめた。そこから「関係機関・職種の支援方針を育児者に理解してもらい、より専門的な療育支援サービスを無理なく継続利用できるようにする」を家庭訪問援助の特徴とした。「自分は実施したことがない」回答者数が多いのは「就学に向けての育児者の認識を把握し、児にとって順調な就学の状況を整えられるようにする」他 1 項目だった。

(6)事例ごとに分析の視点「6) 看護援助の他事例や保健事業・施策への反映」をあてて、保健師の意図と行為の組み合わせ 62 件を概観して取り出した性質の記述をさらに概観して、「発達障害の診断を受け入れられない育児者、家族の理解不足で支援できない事例も多いことに考慮する」「健診や予防接種、医療機関定期受診の特徴を活かし、機会を捉え児と育児者の状況を把握する」等(他 6 項目)とまとめた。そこから「発達障害の診断を受け入れられない・就学予定の学校に知られたくない、家族の理解不足で支援できない事例も多く、健診や予防接種等の機会を活かして事後支援する」を家庭訪問援助の特徴とした。「自分は実施したことがない」回答者数が多いのは「上の子の支援・就学時に形成した学校・保育園との関係を、本児に活かす」他 4 項目、「重要と思わない」回答者数が多いのは「下の子の発達障害の可能性を視野に入れて、健診時等で予防的に関わる」他 1 項目だった。

(7)事例ごとに分析の視点「7) 関係職種との連携」をあてて、保健師の意図と行為の組み合わせ 47 件を概観して取り出した性質の記述をさらに概観して、「担当者会議の場で、本児に関わる関係職種と育児者とで支援の方向性を統一させ、療育支援体制に不信感を持たれずに安心して療育できるようにする」等(他 5 項目)とまとめた。そこから「児の状況を保健師と関係機関・職種が共有し、関係職種と育児者とで支援の方向性を統一し、役割分担・連携のもと、支援が途切れないようにする」を家庭訪問援助の特徴とした。「自分は実施したことがない」回答者数が多いのは「小学校担任が本児と育児者の療育ニーズに適切に対応できるよう、療育機関と学校との連携を調整する」他 4 項目だった。

<引用文献>

① 田村須賀子：母子保健福祉活動　障害児支援活動,(宮崎美砂子他編),最新公衆衛生看

護学各論 1 第 2 版, 67-84,日本看護協会出版会,東京, 2015.

② 子吉知恵美, 田村須賀子.発達障害児の保護者の発達障害に対する受容状況および発達障害児とその保護者への保健師による援助方法.家族看護学研究.2013;18(2):83-94.

③ 田村須賀子:家庭訪問,(宮崎美砂子他編),最新公衆衛生看護学総論 第 2 版,212-252,日本看護協会出版会,東京,2015.

④ 田村須賀子:家庭訪問援助を対象者が受け入れる信頼関係形成に向けた看護行為の特徴,日本看護学会誌, 15(2):78-87,2005

⑤ 田村須賀子:看護職の家庭訪問がもつ「保健事業・施策に反映させる」という特質の特徴,保健師ジャーナル, 60(10):994-999, 2004

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　2 件）

① Tamura S. Characteristics of Home Health Nursing in Areas near the Mountains for Children with Suspected Autism Spectrum Disorders and Their Parents. 日本ルーラルナーシング学会誌.査読有. 2014;9(1):11-25.

② 子吉知恵美, 田村須賀子. 発達障害児の保護者の発達障害に対する受容状況および発達障害児とその保護者への保健師による援助方法.家族看護学研究.査読有. 2013; 18(2):83-94.

〔学会発表〕（計 10 件）

① 田村須賀子, 山﨑洋子. 発達障害の可能性を危惧された「気になる子ども」と育児者に対する個別支援の特質. 第 73 回日本公衆衛生学会総会;2014 Nov 5-7;栃木.

② Tamura S. Characteristics of the Home Health Nursing Practice of Public Health Nurses who Care for Children with Suspected Autism Spectrum Disorders and their Parents: Providing Care Congruent with Family Life. 36th International Association for Human Caring Conference; 2014 May 24-28; Kyoto.

③ Neyoshi C, Tamura S. The types of tailored support public health nurses can provide to the parents of children with autism spectrum disorder, depending on the levels of parental acceptance of that disorder, 36th International Association for Human Caring Conference; 2014 May 24-28; Kyoto.

④ 田村須賀子. 発達障害を危惧した「気になる」子どもとその育児者に対する支援指針の検討.第 72 回日本公衆衛生学会総会;2013 Oct 23-25;津.

⑤ 田村須賀子. 発達障害を危惧した児に保健福祉資源を適用させる山間地保健師の支援の特徴.日本ルーラルナーシング学会第 8 回学術集会;2013 Oct 13-14;和倉.

⑥ Tamura S, Neyoshi C. Healthcare Needs of Children with ASD and their Parents Using Child Developmental Support Services. 21th IUHPE Conference on Health Promotion; 2013 Aug 26-29; Pataya, Thailand.

⑦ 田村須賀子. 発達障害児への家庭訪問援助における家庭・地域生活に見合った支援の特徴.第 16 回日本地域看護学会学術集会;2013 Aug 3-4;徳島.

⑧ Tamura S. Characteristics of Health Support Regarding Cooperation between Public Health Nurses and Multidisciplinary Professional Childcare Providers to Children with Autism Spectrum Disorders and their Parents. 9th European IUHPE Conference on Health Promotion, 2012 Sep 27-29, Tallinn, Estonia.

⑨ 田村須賀子. 保健師の家庭訪問における発達障害児と養育者の援助ニーズの優先度判断の特徴. 第 15 回日本地域看護学会学術集会, 2012 Jun 23-24, 東京.

⑩ Tamura S. Characteristics of Health Support Provided by Public Health Nurses to Children

with Autism Spectrum Disorders and their Parents. The 2nd Asia-Pacific Conference on Health Promotion and Education, 2012 May 4-6, Taipei, Taiwan.

〔その他〕
ホームページ等
http://www.med.u-toyama.ac.jp/chn/staff/indextamu.html

６．研究組織
(1)研究代表者
田村　須賀子（TAMURA, Sugako）
富山大学・大学院医学薬学研究部・教授
研究者番号：５０２６２５１４

(2)連携研究者
子吉　知恵美（NEYOSHI, Chiemi）
石川県立看護大学・看護学部・助教
研究者番号：５０３６３７８４

山﨑 洋子（YAMAZAKI, Yoko）
山梨大学・大学院総合研究部・教授
研究者番号：１０２４８８６７